

### 1、従来の村落研究について

これまでの村落研究というとき、それは戦前と戦後とにわけられるが、戦前までの研究は、ムラそのものを本格的にとりあげることにはならなかつたと思う。家や同族の問題はとりあげられ、それがムラと関連をもつてはくるが、ムラそのものを真正面からとりあげたのではなくて、いみじくも家連合という形でムラにひろがつてゆく研究のあり方が一般的であった。ムラは家連合としてのムラであり、重点は家とそのつながりにあつた。鈴木栄太郎の場合は、ムラを撮つており自然村の概念が出てきている。しかし、彼の場合、一つのシステムを作りあげたという大きな功績はあるが、ムラそのものの分析は平板であり、有賀の仕事の方が一段上だと思う。

### 最近の農村と村落研究

福武直

今年の大会の課題は「村落社会研究の方法」ということであるが、そこでいわれてゐる「方法」とは、具体的な調査の仕方とすることではなくて、もつと大きな理論的枠組、村落研究のアプローチないし視角といふ意味であろう。しかし、方法的な検討といふとき調査のやり方とすることを完全に無視してよいわけではない。重点は後者であろうが、その扱い方では調査方法のあり方も関連してくると思う。そのように理解した上で、従来までの研究をそうちた視角からふりかえつてみようと思う。

長へといふ動きの中で、都市とのつながりを無視することができなくなり、一層研究対象がひろげられたということではなくかと思う。ところが、対象が拡大されたことは同時に調査の密度がそれに応じて稀薄化していくことだといえなくはない。

こうした対象の拡大に応じた視点の変化もある。戦後もなくの時代においては、封建的なものからの解放という視点があった。その評価にちがいはあったが農地改革が大きくとりあげられた。しかし地主制が一応解体したあとも、封建的なものからの解放がなかなかむづかしいということから、マルクスの遺稿の影響も無視できないが、共同体の問題がクローズアップされた。村研が生れたのもその頃であり、共同体は時潮社版の年報で二回にわたってそのテーマとされたのである。しかし、理論的にはともかく、前に述べた対象の拡大とともに、共同体の問題は現実の村の中で検証する努力があまりされないで、本当の意味においてつきつめられないままに、農民層の分解といふ視点が非常に有力になり、そして現在にいたつてゐるところであろう。

村落社会は一つの部落としてのムラにとどまるわけではないし、またとどまるべきでもないが、ムラの把握がもつときちんとなされなければ、ムラをつらねた農村社会や都市との関連も、本当の意味で明確には把握できないといつてよいであろう。その意味で、現在問題なのは、経済成長下の村落が一体どういう風になるのかといふことである。その場合、それぞれの研究者はどうなつてほしいとう考え方があろうし、それは研究者によってそれぞれとなるであ

らう。そして、その考え方のちがいにもかかわらず、どうなつてほしいう方向と現実の動きとの間に、大きなひらきがあるのが普通であろう。そして外からの動きとして、基本法農政、そのゆきついたところに総合農政が出てきていくが、とにかく農業危機ともよびうるような、日本農業の展開点であり、村落研究もそういう時代の問題をもつるのである。

## 2. 今後の村落研究の課題と方法

村研は、いろいろな考え方の人が共存しうる場であったし、またあるべきだらうと思うから、体制的な視点を非常に強力にもとつとすると人とそうでない人とがありえてよいのであるが、今日一般的には体制との関連においてムラを見ようとする考え方方が有力である。その意味において国家独占資本主義の下におけるムラ、その収奪下における農民層分解が中心的視点とならねばならないといわれる。そのことだ。大きくみて異議をとなえるつもりはない。しかしこで考えねばならないのは、そのようにいふだけでよいのかといふことである。おそらく農業問題が本当の意味において解決されるためには、体制の変革がともなわれねばならないであろう。いつかは日本本の条件にあつたそらした体制が実現するだらうと思う。しかしながらに考えねばならないのは、社会主義にならなければ解決できぬといふことをいふだけでよいのかといふことである。研究者はそれでよいわけだが、現実に生きている農民、その農民がつくつてゐるムラを考えると、そういうふうだけでは無責任ではないかといわ

さるをえない。どういう農業、どういう農村が生れるのかどうことを考え、それへ接近する道を同時に示さなければいけないのでないか。私は初期の頃には簡単に社会化といつたが、そういうことをいう自信がないので、その後はいわくなっている。しかしあれわれとしてはそこまで考えてゆかねばならないのではないかと思う。

ところでムラの現実、農村社会の現実であるが、農民層の分解を基軸にしてムラをみることが重要であることを否定しようとは思わない。その分解の現実は、この高度成長期においては結局、兼業化・機械化・稻作といったものがからまりあって動いているということがと思う。こうした稻作偏重の中で、いまにして思えば、革新の側はもともとのことを先どりしなければいけなかつた。保守党と同じことをいい無原則に対応策を出してくる保守党にただ反対するだけでは、先どりはできない。そのことは農業問題に限らず日本の革新のすべてについてそういうことがいえる。兼業化と奇妙な機械化とがかなりあつて動く中で、農民の側からはさまざまな試みが示される。それは必死になつて分解をくぐりぬようとするものであるが、外からの動きを考えてみると、そのところも分解をおくらせること以上のことはできないだろう。今後どれだけ経済成長がつづくかは明らかでないが、さらに分解基軸が上昇することはされられない。こうした分解をわれわれはどう考えるのかといふことも大きな問題点になるであろう。私が離農の問題に関心をもつたのもそのことと無関係ではない。これに対して、離農など考えるのはけしからんと

いう考え方がある。しかし納得がいかないのは、体制が変わったと仮定した場合に、現在の農民をすべてその体制下で維持できるのかと、いうことを考えれば、これはとうていできないことであるということである。ただ、体制が変わった場合には安全な形で離農させられるということがいえるにすぎない。現在のシステムの中でもうまく離農ができると考えるのは、あまりにも楽観的な見方だと思うが、それでもかかわらず離農は行なわれてゆくであろう。したがつて結局、安定した形での問題解決の方向は出て来にくくと思う。その場合さらに考えられることは、そういう矛盾がだんだん大きくなつてゆけばよい。そうすればやがては……という考え方もある。それから、体制が変らなければどうにもならないのだから、そういうことをじろじろ考えてもしようがないといいい方もできるだろう。しかし、そのようにつき離すことができるのも、われわれならできるのであって、農民はその中で生きているのだから、そうはいかな。そのように考えるならば、やはり現在の中ですこしでもよい方向にむけにはどうしたらよいかが示されねばならない。ここでよい方向と、いうのは、多少とも問題の深刻化を防ぐことであり、ある意味では変革への展開点を先にのばす機能をはたしかねない面もあるが、だからといってそうすべきでないといつたいたい方はやめるべきであろう。体制変革といふことをいわぬまでも、目先のきげんとりでなく、一定の方向を見定めた、農業をよりよく安定させムラの生活をもう少しよくしてゆくような農政が出てくるような方向に政治の体質をえてゆく芽が、ムラの中、農民の中にみられるのか

どうか。どのようにしたらそういう芽を育ててゆくことができるのか。

そういう視角から、農民・村落を考えなおしてみると必要なのでないか。そういう動きの中でムラはどのような役割をはたしているのか。ムラはどのような動きに対し制約となっているのか。そのムラは、どういう形になつたらよろづのか。そしてそれが自治体とどのようにつながるのか。身近な自治体における政治の動きが变つてゆくことが、国の政治への影響力をもつことになると思うが、そういう条件がどこにあるのかとくつた視角で、ムラをもう一度根底的にとらえなおしてみることが現在必要なではないかと思う。

そのようみるとならば、はじめにわれた方法の問題としての調査のやり方が問題になつてくると思う。有賀の仕事の重みについてはすでに述べたが、われわれにはあれだけの調査をかさねながら日本全国を旅行してまわる余裕はない。そしてまたそれに対応して相手にしてくれる地主もいなくなつてゐる。同じようなことはできないわけだが、やはりあのようなキメの細かいムラの研究がここで必要なのではないか。ムラの中に入つてもっとくわしく観察する必要がありそうに思う。われわれこれまでの調査は一体どれだけ時間をかけているだろうか。住み込んで何をも知らねばならないとは思わないが、ムラの中のどの家も全部頭にうかぶほどの時間をかけてはいない。その意味では有賀はともかく、ドーアほども長く村の中にいて調査をしているであろうか。かつて川本と柿崎がやった調査は相当長期のものだったが、もう少し時間をかけたキメの細かい調査

のやり直しが必要だと思う。

このように現実そのものから学ぶことが必要だが、その場合、國家独占資本主義下の農民層分解の具体的あらわれをもつとムラの段階においてとらえる必要がある。そうした場合に、われわれは尺度をもつてゐるのだからその尺度でみさえすればよいと考えるのは、理論のおしつけであって、本当にムラを理解し正しく把握することにはならないのではないかと思う。

村研のメンバーがあちこちの村でこまかい調査を一齊にやり、それをもちだして討論するということをやってみてはどうか。それと一〇年ぶりに行なわれた全国的な集落調査をつきあわせて考えると、いったことを村研の一つの課題にしてはどうかと思う。そういうことが行なわれることが、村研の存在意義をもう一度あきらかにする道につながるのではないか。じいかえるならば、農民層の分解としても、村研でなくとも農業経済学会でよいではないかといふことは、村研としての存在意義はないのではないか。ムラの中にじこまるのではなくて、大きい視野の中でとらえなおし、もう一度密度のこい調査をやりなおしてみる。そういうことをやるために方法論的討議を今度の大会でやつてもらえればありがたいと思う。

(以上の報告ののち、約二時間にわたつて話しあいが行なわれました。以下はその要旨です。)

まず報告者が第一回の研究会の経過を伝える研究通信六九号の中で「生活をくまぐりとらえるために、人類学のようだ長期間生活

をともにするといった方法が必要といつて見方に対して、理論なしで方法論が重要な反対の立場から発言があった。

川本「その時人類学的調査といつたのは、今日の報告でいわれたことと同じ意味と思う。理論枠組が先にあってそれでわりきってゆくのではなくて、農民の方から考えきづきあけて、それと理論とのかかわりを検証するといつやり方である。調査において大切なのは想像力だが、それを働かず余地のない調査をやりつけてしまっている。調査論といつと理論枠組を設定してそれを検証するとされるが、逆に想像力をフルに動かして農民側の論理を追つてゆき、それと理論枠組とぶつけてゆくといつたやり方がほしい。それは、調査の方法論だけの問題ではないと思う。」

福武「これまで要領がよすぎて必要なところだけ見て、こうだとわりきりすぎていたように思う。もう少しムダなことまで知らないとムラを本当に知つたことにならないのではないか。」

蓮見「きだみのるは、村に住みついて比較にならないほどの密度でしらべているが、あれをどう評価するのか。」

吉沢「有賀の場合には、地主といつ共感者があった。きめの細かい調査といつときどういう農民層とタイアップしてやるのか。」

福武「そこで運動をするわけではないのだから、すべての農民層つきあえはよい。ただ地主がなくなつただけにじつくり相手にしてくれなくなりそれだけむづかしくはなつたが、少し時間をかけば、ムラ全体で個々の家の内情まで具体的にわかる。そうすれば理論的なことにももう少し自信がもてるようになると思う。」

安原「長期滞在調査が必要だと考えるのか。」

福武「必ずしもそうではない。ただ、小さい部落をおさえた調査

がないわけではないが、多くない。役場の資料や書きとりによって自分の枠組にしたがつておさえていたが、村の中の一戸一戸が全部頭に入るような調査をやつていられない。現在の段階で一度それをやってみる必要がある。ただそつういう調査をやるだけの条件はなくなつてきた。これから農村を研究する大学院クラスの人が、一度ムラの中に入りこむとよいと思うが。もっともきだみのる式にとりこになつてしまつては困るが。」

皆川「きめの細かい調査をやる必要があることは自分も痛感するが、今の時点でそれをやるべきどうしようところにポイントをおいてやるべきなのか。」

福武「特にないが、もう少し自信をもつてものをいつために、これだけといつわけではないが一つやつてみる必要がある。もっともらしいことを言つてはいるが本当にそつんなのか、村の実態とむすびつけて考えなおしてみたいわけだ。」

柿崎「戦前には地主・大屋をとらえれば小さな集落が大体カバーできた。今はいろいろな層があり、誰かに焦点をしほることが困難

になつてゐる。部落も完結した集団ではないまでも、一つの集落としてまとまつてゐたが、今では他の地域との関連が密接になつてきて、一人の人の視野に入れることが困難になつてしまつて。そこで共同研究が生きてくるのだが、共同研究にはうまく成果があがらないところもある。

例えば、千葉の君津町を三九年からフォローしてゐるが、今一つの部落が全部宅地造成にかかつて全く農地がなくなつてしまつた。わずか五年ぐらいでみどりに変つたが、その間に部落のリーダーもはげしく交替してゐる。前は一〇年、二〇年と一つの部落をやつても変化はあつてもそれなりに静態的にとらえられたが、今は五年ぐらひづけて見てゐると、変化する様相が前よりは露出してきている時期にある。八幡製鉄がくるときには積極的に支持してきてくれた老人もある。そういう形で農民層の分化が多極化しているが、その間の動きは単純でなく、農民がさまざまの曲折をたどりながら一つの結果にたどりついてゐる。その結果だけみれば何でもないことだが、その間の社会過程をたどるとともに大きな問題を理解できる。町村合併の問題で、八幡は直接何もしないといつてはいるが、水・道路・従業員の宿舎などいくつかの町にまたがつて具合のわるいことがあり、特に工業用水の問題が大きい。こういう所では一つの集落を対象としても、そのひろがりは郡単位ぐらいまでひろがつてしまつ。水の問題などではダムまで行ってみなければならないこともあり、一人でやれる

調査は限界がある。」

福武「まさにそういうことで対象がひろがつたのだが、ひろがりっぱなしになつた。もう少し自信をもつてものをいつために、一つのムラにとりんで大きな視野からみて、本当に理論が妥当するのかどうかしらべなおす必要がある。」

安原「確信がもてないと、これは、農民層分解の現状の中で、どういう層に一番ポイントがあるのが十分明らかでないことをいつのではないか。分解の経緯をみて体制の中で問題解決が困難だといふことをいつのは、研究者としては必要なことだと思う。それに對してそれだけいふのは無責任だといわれるが、さりとて安易に対症療法を出すことも無責任だと思う。そこにありうべき展望と現実との距離を定めて、その接近の方法を提示してゆくことが必要なのではないか。しかしそのことがかなりむづかしくなつてしまつてるので確信がもてないといわれるのではないか。そうだとすると分解の中でどういう農民層がいろいろな困難にたえてゆくのか。上層でも農外へ移行するものもあり、もっと小さい農家でとにかくやつてゆくものもある。しかしそういうことまでは統計には出てこないし、ちょっと入つただけの調査ではわからない。本当の農民、中核的な農民を貧農的に共同化させないとだめだと思うが、困難にたえてやつてゆける農民をみつけることが必要だということではないか。そこで、どういう農民をとらえるか、どこにケルンがあるか、ということはかなり曖昧になつてしまつが、ないとはいえないのに、どこにあるのかを聞きたい。」

福武「貧農の共同化といふが、貧農とは何かといふことに疑問を

もつ。どの層が貧農なのか。離農が進んで農家が少くなれば問題が解決するというような生やさしいものとは思わないが、同時にいまのままの農民をかかえ込めるというのも全く空想だ。体制がかわってもそりはいかない。全部がまた貧乏になるというなら話は別だが。農民は一生懸命に対応していく。集団栽培などがそれだが、分解をチェックする役割をしていく。それでよいのだろうか。いまのまま矛盾が堆積して、それでいつか爆発するということはよいのだろうか。そりはいかないのでないか。

米がこういう形になつたが、それをもともどすことは今の体制では不可能だ。革新側は米価をあげて払えということだけいつており、自民党の方とあまり変わらない。ただ自民党には圧力団体があるのでも、そりはいかないといつてきりりとしている。そういう点で合意がないのは、米価をそんなにあげてもと村研でいたことがあるが反論が出た。木下氏はあげてもしょうがないという考えだったが、革新の対応がすでにおかしいのではないか。もっと問題を先どりすることが必要だろう。その場合農民の票はすぐにはつかまえられないが、将来にはなるほどということでついてくるといった対応の仕方があると思う。」

皆川「先どりした理論がかたまつて出ればよいと思うが、農村社会学の中ではそこまでいっていながら、農業問題でも出でしないのではないか。大型機械化といつても机上プランだけで、採算のとれるような形で実現するプランはない。革新のやり方が保守的だといつても、どこをどう改めるかはなかなか把握できないと思う。そり

いうことで調査は大きな意味をもつが、しかし思つてゐることは調査をやつてもよくわからぬ。」

福武「減反はどういう風に処理していくのだろうか。」

皆川「六月に新潟の白根にいった。役場で計画書を作り割当目標を出しているが、どうしてもやれとはいっていらない。そこで部落によつては、はじの方の作れないところを三反ぐらしあやつていなじところもある。減反すれば収入がへるので、県全体としても達成率は低いし、特に生産力の高い地域は低かった。ここでは農民は、中には仕方がないという人もいたが、ほとんど全部反対だった。」

三月に島根の匹見町の手前の美都町へ行った。ここは目標に対して申出の方が六割ぐらしあ多かった。生産条件の悪いところで下から見あがると田がみえないで石垣ばかり見えるところだが、いく前には米でも作るほかないところなので減反はきつとのではないかと思つていてが、若い人が皆出てしまつて年よりしか残つていなか。そこで年よりが神経痛をおさえて米つくりをするか、三万いくらをもらつて骨休めをするかという選択になる。そこで申し出がたくさんできた。」

川本「大きっぽにいふと減反は全国では目標をはるかに突破したというが、生産力の低いところで突破し、生産力の高いところでは目標までいっていなかうことなどな。」

柿崎「長野県の富士見町では一一〇町余りの目標に対して二九〇町以上減反している。これは米作日本一を出した生産力の高いところだが、諏訪工業地帯に通勤する兼業が多い、その影響と思う。」

皆川「減反に直接どれだけ応じたかということだけでなく、農民

への心理的影響が大きい。白根では個人で中型トラクター・田植機をもつてゐる。そういう中でも自分のもつていた田が工業団地になるので一〇〇〇万ぐらいで売れ、一反売ると近くの田を七反ぐらい買えるので、一五〇万ぐらいで田を買つてゐる農家もある。一五〇万もするのでは採算にあわないし、株でも買って寝てくらした方が得だと思うが、そういう所はいかにも生産者の魂をもつた農民だと思つた。しかし、こういう特殊なケースをのぞくと経営をのばしてゐる農家はない。そうなると蒲原の農民もこれまでのよう自前でやってゆくことはむづかしくなる。そのときどういう対応が出てくるのか興味がある。庄内だと部落単位で集団栽培の形をとつてゐるが、ああいうやり方でどこまでゆくかという問題がある。個別経営としてやってゆく条件はほとんどなくなり、何らかの形で何らかの組織が中心にならないと農業がやれないようになつてゐる。その点がこれからどういふ風に展開してゆくのか見てゆきたいと思ってゐる。ムラの問題を考えるにもそういう変化の芽を考える中で位置づける必要があり、いつでもムラとくら固定観念で見てゆくとかえてわからなくなるのではないか。」

川本「大学紛争などのとき何故農村社会学をやるのかと学生にきかれるが、ムラへ行って共同化みるとそれに共感を感じる。しかし考えてみるとそれは富農化の一形態で、革命に対しても体制側にたつものだ。これらを見て日本農業の将来の姿といつた見方をしてよ

るものなのだろうか。」

福武「そう簡単に体制変革などありそうに思えないが……。日本の農業は米だけ作るモノカルチャーになつてきただが、年間働けるような農業にならなければだめなのではないか。一人でやってゆく農業もありえようがやはり何らかの形で共同せざるをえまい。日本ではもともと中農が貧農なのであり、分解基軸が上ればますますそういうのであり、中農より下のものはくびきりでは困るが出て行つてくれといつてよかつたのではないか。ムラを考える視点からいっても十数年前にはムラは上層がにぎつて彼らのインタレストによつてムラを動かしてくるといふとらえ方だったが、今ではむしろ足手まとになる小さな農家がムラを牛耳ることになつてゐる。」

蓮見「農村社会学は時代はなれしていく魅力がなくなつたということときくが、その一つは、もうムラを問題にすべき時期ではないことだといわれる。そういうときには、またムラをつかまえるためにどうことでよいのだろうか。」

福武「ムラをとらえるといふのは、ムラをのこすためでなくて、いわばムラをこわすためである。ムラは生産の単位であつては困るのであり、その制約をこえてゆく方向をさがすことが必要だ。」

皆川「それでは何がかわって生産の単位になるのか。」

福武「ムラといふのは農業者だけでなく一切合切をふくんでゐる。農業をやろうとする人がもう少し合理的に過剰投資にならないよう機械を使ってやってゆくことが今後必要であり、そうなるのに何が必要か。そういう風になる上に何が制約になつてゐるのかといふ

のがムラをとらえる問題意識である。」

蓮見「ムラをなくすためにとくにことだが、ムラがなくなつた状態とくのはどういうイメージになるのか。」

川口「ムラをムラたらしめているものが何かとくことを見つかりさせないと、ムラがなくなつたといふことをいつてもわからない。それは何なのか。景観が変ることではないと思うが。」

福武「ムラが生産の単位であることが解消するということだ。そのときにもムラには農業をする人以外の人もいるから、地域社会の一つの単位としては残っているが、そこでは地域社会としてのムラに住んでいることが、すぐにムラが生産単位とはならない。もちろん土地の制約があるが、農業をやっている人が自由にむすびついて農業生産上の協力関係をむすんでゆく。そうなるとムラの境界とかムラの土地であるとかいった意識もなくなるだろう。」

蓮見「川本氏はムラの領土といふことは何故でてくと考るか。」

川本「それは土地所有だと思う。個々の農家が土地を私有してゐるわけだが、私有だけに終らずにムラの總保有を根底にもつてゐる。そのことの具体的なあらわれである。今までムラの共同体的基盤を土地の共有と理解していた。共有部分があることが基盤と考えられていたわけだが、もう一方の私的所有の基礎にも共有分があるということがある。具体的には、生産の単位としてのムラの共同といふことがなくなれば、ムラの共有分がなくなると思うが、原理的には区別しておいた方がよいと思う。」

福武「ムラの境界といふのは、徳川期以来の伝統の方がつよいと

思う。ただそろ考えるとさらにさかのぼつて、徳川時代に属地主義にしたのは何故かとくことになるが。」

川本「歴史的にみるとたしかに徳川期に入つてから、地縁的結合が強調される。権力からもそういうことがあり、地縁集落としてのムラが歴史的產物だといふことはわかる。」

福武「年貢を属人主義的にとることもできるが、そうしないでムラの境界を定め、その中の年貢はその村の責任にし、入作だらうとムラの範域内ならばムラの名主の責任にした。その方が領主の方からは年貢徵収が都合がよいのだろうか。それともアジア的專制の下では属人主義になるのだろうか。中国でもインドでも境界はない。こうした徳川期からの伝統を土地台帳も受けついだわけだ。」

川口「調査をしていての印象だが、ムラの領土は水田地帯ではつきりしてゐるが、畑作地帯特に新開地ほどあいまいになる。あるいは低湿地帯などのまわりから早いものがちに入つてきたような所ははつきりしてゐない。あえていえば、鹿児島の門割制度は労働力単位で、土地を単位とした労働組織ではなく、それにいたる前の段階で、畑作地帯に多い。しかし鹿児島でも水田地帯になるとかなり早くから門割制度は分解してくる。中国の場合でも南の水田地帯では多少ちがうのではないか。」

福武「南の水田地帯では、クリークがあつて境ははつきりしてくるが、徵税の単位は属人主義である。」

柿崎「中世のまだフロンティアがあり、実力があれば拡大していくとく名主經營の場合に境界はどうだったのだろうか。近世に

村検地が行なわれて、フロンティアがなくなる時点が境界が線として出てくるときだろうが、近世になつてからでも、ムラ境をめぐる論争があり、そういうときの力関係でだんだんに境界がきまつてしまつたのだろう。他の村が出てくるところで一線ひく必要が出てくるわけだから、藩権力と同時に他のムラとの対立関係がなければ境界もいらないわけだ。」

福武「戦後調査した頃には大抵の部落が出作入作を意識して、入作の方からも部落費をとつていた。反別で部落費をかけるときには入作者にも反別割をかけていた。しかし今では役場から資料をもらつてきてかけるようになり、また部落費が大幅帳式のものから分化してきしたことでそういう点が變つてきてはいるのではないか。農事組合が水利費をとるときには入作者もとるであろうが、部落費はそうではなくなり。それに応じてムラの境界についての意識も変つてしまつてゐるのではないか。はつきりしていない所もあるといふが、ついつめるとそういうことも関係してゐるのではないか。」

柿崎「境界をどういう機会に意識するか時代によつてちがうだらう。境界が今あるとしても、それがどういう意味で生きているのか。どういう場面で意識されるのが問題だ。」

福武「町村制も境界をきめて出作入作のような形になつてゐる。アメリカのように機械的に行政区画のあるところでは属人主義的になつてゐるのだろうが、ヨーロッパではどうなのだろうか。」

川口「フランスの農村のルボルタージュなどをみてみると、境界が問題になつてゐる。」

安原「耕地整理をしても領土の境界は残るのか。」

川口「静岡でしらべた結果でははつきり残つてゐる。耕地整理をやるときにも、わが部落の耕地整理と隣部落の耕地整理とは、図の上では並んでいて感覚がちがう。入作している人の分は、隣部落からよろしくたのむといつてくる。それをこちらの部落でひけうけて管理する。繩のびがあつて、隣部落よりこちらがきびしいと、台帳通りにやると領地が移動してしまうといったことがおこる。そういうとき耕地整理でかえつて境界がはつきりしてくる。」

安原「私が東村でやつたときには、やはり万難は入作にかけていたが、耕地整理のときに出作入作をわりかえている。入作していたものはむこうの部落のものにしてはいる。それが出来たのは耕地整理という大事件があつたので再編成されたためだろうと考えていたが、今の話をきいてみると、沼沢などをうめて耕地がかなりふえたのでやれたのかとも思う。」

川本「岡山のときは、耕地整理を機会に整理再編されたように記憶してゐる。」

川口「可能なかぎり、属人的に交換分合するようだ。」

川本「富山では国鉄の引込線で土地が区分されてしまつたので個人的に交換分合してはいるのだが、万難は手ばなし方からとつている。」

安原「耕地整理したところでトラクター利用組合などができたとなつてゐるのだろうが、ヨーロッパではどうなのだろうか。」

川口「フランスの農村のルボルタージュなどをみてみると、境界がよいといつたときでも、他部落の人と一緒にやることにはならな

じようだ。観念的にそういうことがあって共同化などでも部落が意味をもつて居るようだと思える。

柿崎「今のような話と蓮見のいう農道を基盤とした共同体とはどう関連するのか。」

蓮見「川本氏のいうように個々の土地所有の中に共同的なものが含まれて居るということはたしかにその通りだと思う。土地所有の性格が本来の意味での私的所有でないことのあらわれで、そのことがいろいろな形で表現される。領土の問題も、ムラ仕事ももとは同じもののちがった表現形態だと思う。だからどれをメドにしてみていいたとき一番よくわかるのかといふことが問題となるう。」

福武「今度の大会でつけたしぐらいに、来年こうすることをいろいろな調査に行つたときについでにみてきてらしやあわせてみるとやつてみてはどうか。こうじう風に話していくと皆が発言できるし、ちがいがあるとしたら何故かといふことで、何かつみあげができる。あまり欲ばらないで、もちよつてみようとう点を考えてみてはどうか。」

宮崎「今日の話をきいて感じた点が三つある。第一点は、現在の農業問題が、体制変革しないうちは処置なしとつき離すことはできない。現体制の下で若干でもまし対策を地道に考えようといわざりきである。その場合それは積極的なものなのか、それとも体制変革はなかなか出来ないから麻薬でもよいからうつておこうといふような消極的な原理にうらづけられて居るものなのかなと考えてみなければならないと思った。」

第二は、現在、費用・時間などの点で窮乏状態にあるがその中にありながらも密度の高い調査をしなければならぬという点についてである。この点では各専門分野にまたがる人ひとが共同して調査をすることが効果があるのではないか。集団栽培とか家族協定とか、村が何か出来事をもつて居るときコンサルテーションを頼まれるのは、経済・経営・法律などでそれらは臨床医なので、着物をぬいで見せてくれる。そのときわれわれは必要な範囲だけみて帰ってしまうのだが、社会学の人(いわば生理学・病理学の人)が一緒にいてつづりでにもう少し調査をすれば、時間や費用がなくとも効果的に密度の高い調査ができるのではないか。

第三は、ムラが地域社会の単位としては残らないのではないかといふ点である。それではかわって出てくる生産単位は何かといふと個々の農業者といふことになるようになつたが、その場合当然規模拡大しないとつづてゆけない。そうすると土地を自分の經營にくみ入れる必要があるが、その集積のメカニズムはどうなるのか。逆に兼業のものが土地を保有しつづけるときのその型式、メカニズムとは、市民法的契約——放つておいてもAとBとが取引してゆくといつたことだけでは無理ではないか。それができない根柢は何かといふことは大きな問題で、おそらく国家独占資本主義の下での低賃金高地価といふメカニズムがあるのであるが、それはそれとして、ともかく市民法的契約だけでは個々の農業者の拡大にも保有にも不十分である。その不十分なところをうめるのは何か。おそらく集団栽培などでは、ムラの倫理がうめている。それがだんだんゆきづま

り先進地ほど集団栽培はゆきづまつてきている。ムラが後退しても市民法的契約で全部うめられることにはなかなかならない。そこに行政的干渉が入つてくる。こんなに安くして請負耕作などできないという人には補助金を出すというように。それでも限度がある。それをうめるものがやはりムラの論理であるといふ時期が当分つづくのではないか。それがつづくのかどうか、その辺りを研究しなければならないと思つた。」

福武「第一点については消極的なものであるよりも積極的なものであることがのぞましい。のびてゆきながらつきあたる。つきあたる壁を動かすためには、もっと何か変つてこなければならぬといふことがのぞましい。そういう方向がないかといふことである。」

最後の点については、個別經營で何とか所得の上昇をおいかげうる農家もあろうが、それではどうにもならないといふ農家が多くなつてきて、そこで何とか一工夫せざるをえない。そういう方向でムラから離れてゆかざるをえない条件は出てくるのではないか。中型トラクター一段階といふことになると個人では処理しきれなくなり、先どりする連中が個人で他人の分までひきうけてやつてもゆきづまつてくる。そこでもう少し合理的な共同利用が出てくるのではない。自動耕耘機も過剰投資には違ひないが、まだ過剰投資がしのべる機械だつたが、中型になると個別ではおいつけなくなる。そういう技術的契機から協業形態が出てこざるをえない。だから土地の集積といふことはあまり考えていない。少しうらい離農しても残つた農家が大きな経営になりうるわけではないし、大きく離農させるだ

けの高度成長も社会保障もありえようとは思えない。」

宮崎「土地の集積といつても所有権をえることに限らず、利用権だけをうることも考へてゐるわけだが、那段階では、川本氏のいう土地の保有に対するムラ的一体性を活用せざるをえない場面が、当分つづくのではないかといふ気がしてゐる。」

川口「ムラの論理といふ話は面白く聞いた。いわば領といふのはムラの論理が働く単位だと思う。市民法で処理しきれず行政的にも処理しきれない隙間が、ムラの論理が働く場だとすれば、これからその隙間が拡大するか縮小するかが、これからムラの論理がどうなつてゆくのかにかかる。簡単にムラの論理がなくなつてゆく方向だとはいえない。もし領がせますぎれば、領を二つあわせたものが場になることもありうる。存在理由があるかぎり、好むと好まさるにかかわらず、ムラの論理があると思う。おそらく農民が一番信頼しているのはムラの論理だろうから。」

○右の研究会に先だって委員会を開きました。一つは大会の準備で、共通課題に関する司会者・報告者について相談しました。もう一つは、年報編集に関して若干申しあわせをした方がよいといふことで、その原案を検討しましたが、これは次号通信でお知らせした上、総会で御審議ねがうこととしたしました。

◇  
◎年報第六集は現在校正中。大会に間にあうことができるよう希望しております。